

身代わり忠臣蔵 あらすじとネタバレと感想

○あらすじとネタバレ

時は徳川5代将軍・別名犬将軍と言われる綱吉が治める時代。

物乞いするなまくら坊主の孝証^{たかあき}。誰もお金を恵んでくれない事に逆切れし町民に啖呵を切ります。しかしそこを通りがかったお犬様が襲い掛かり、橋の上で啖呵を切っていた孝証は勢いに押され川に落下します。そのまま溺れて流される孝証を、たまたま釣りをしていたお侍が助けます。お侍から塩飴を恵んで貰ったものの無一文の孝証はある屋敷を訪ねます。そこは吉良邸。実は孝証はただの僧侶ではなく吉良家の末弟で、つまり吉良上野介の弟でした。当時は家督を継ぐ長男は優遇されますが、それ以外の者は結構冷遇されたようで、孝証も貧乏生活を送っています(しかし僧侶の修行が嫌で逃げ回っているだけでもあるようですが…)

度々金の無心に来る孝証を邪険に扱う上野介とその家臣たち。追い払おうとするも居つかれ仕方なく馬小屋で寝るように指示します。

そんなおり、かの有名な浅野内匠頭の切り付け事件が起こります。切り付けた浅野内匠頭はすぐに切腹させられます。一方上野介には目立った処分は下されません。しかし処分がなくとも問題は上野介の受けた傷。頭を切られた後、逃げようとして背中を切られます。これが良くなかった。武士にとって逃げようとして背中を切られるなど言語道断。仮に生き延びたとしても逃げた事がバレれば切腹は止むを得ません。切腹させられれば吉良家はお取り潰し。家臣一同路頭に迷います。幕府の柳沢に何としても言い訳を通し吉良家を存続させる必要があります。しかし肝心の上野介は瀕死の重傷で弁明に向かう事も出来ません。そこで吉良家家臣の斎藤、そして最強の剣客・清水は孝証に上野介の身代わりとなり幕府・柳沢に弁明に向かうように依頼します。初めは断る孝証も100両の報酬とこれまでの借金をチャラにして貰う事で快諾。弁明に向かいます。斎藤の指示通り切りかけられた時は「逃げたのではなく大切な書簡を守るために背を向けた」と言い訳する孝証。疑われるも何とか話を通します

吉良邸に戻った孝証は報酬を受け取って帰ろうとしますが、今度は本当に上野介が息を引き取ります。このままでは吉良家がお取り潰しになる事から、斎藤は孝証に上野介の身代わりとなって殿となるように依頼、1000両の報酬で孝証はこれを引き受けます。

殿になった孝証は元の僧侶姿に「変装」し夜の街に繰り出します。遊郭で大騒ぎする孝証。隣にはお金持ちのお侍さんが。酔ったお侍さんに絡まれる孝証。しかしそのお侍さんは、あの時川で溺れる孝証を助けた方でした。意気投合した二人は朝まで飲み明かします。

朝、店を出た二人。そこへお侍の元に数名の侍が駆け寄ります。

侍たちは「吉良家に討ち入り、上野介の首を取らせて下さい」と懇願します。

そう、孝証を助けたお侍は赤穂浅野家の家老・大石内蔵助で、駆け寄った数名の侍は赤穂浪

士達だったのです。

殿である浅野内匠頭は吉良上野介の嫌がらせに耐えられず切りかかった、つまり正義は浅野側にあります。しかし吉良上野介は何の処分もなしに浅野内匠頭のみ切腹させられています。この事に納得できる訳がない赤穂浪士たち。特に下級武士たちは他の殿に仕える（つまり転職する）事も出来ず行き場がありません。その怒りを吉良上野介にぶつけるしかないのです。しかし大石は復讐ではなく、お取り潰しにあった浅野家の再興を優先、幕府・柳沢に嘆願書を送り続けます。

一方、赤穂浪士たちの復讐心を知った孝証は、命を狙われる恐怖からこの芝居を止めるため斎藤に詰め寄ります。斎藤は何とか年内はこのまま上野介役を演じ、年が明けたら報酬の1000両を貰って隠居すれば良いと提案、孝証もしぶしぶ承諾します。

殿として家臣や町民を見守る孝証。上野介の非道なやり方で今でいうセクハラを受けていた桔梗。1汁1菜という貧相な食事を強要されていた家臣たち。その無茶苦茶な状況を次々に改善させていく孝証に家臣や町民たちの信頼が高まります。

しかし大石の嘆願書もむなしくついに浅野家の再興は認められず、大石はいよいよ吉良邸に討ち入るしかないと決断、家族を田舎に返します。

吉良邸は幕府内にあり奉行所にも近いから安全と思っていた斎藤。しかしここで柳沢より警備の薄い辺鄙な土地へ転居を命じられます。

あえて「警備の薄い土地に転居し赤穂浪士たちに討ち入りをさせたい、返り討ちにし一網打尽にせよ」それが柳沢が孝証（上野介）に命じた赤穂浪士たちをおびき出し皆殺しにする作戦だったのです。

討ち入りとなれば双方に大きな被害が出る事を案じた孝証は大石に接触。今回の転居は罠だから討ち入りを止めるように説得します。しかしもう止まる事は出来ないという大石に、孝証は自らの正体を明かし、すでに上野介は亡くなっている事を伝えます。

それでも止められないという大石に、孝証は「それでは自分（孝証）だけを打ち取れ」と提案します。真っ先に自分が死ぬことで他に被害が出ず討ち入りを終了させる作戦に出たのです。そんな事は出来ないという大石。しかし孝証はこれが吉良家の罪滅ぼし、自分がこんなに人に必要とされ人の役に立てる事に誇りを持ちます。

討ち入り当日には吉良家が雇った用心棒たちの屋敷には釘を打ち付けて外に出られなくしておく事、最強の剣客である清水には大量の酒を飲ませ眠らせておく事、そして討ち入りの支度金まで準備する孝証。

そして決行の日。赤穂浪士たちは吉良邸に侵入、上野介の首を取る事を宣言します。孝証は約束通り、用心棒たちを屋敷から出られないようにし、清水は泥酔させ眠らせています。赤穂浪士たちが戦いを始めた事を見計らい屋敷から庭に出る孝証。自分が犠牲になるのかと止める桔梗。これが「吉良家の責任、ここを出たら好きな所に行きなさい」と語り掛ける孝証。寝間着姿のまま戦いの場に出た孝証は「逃げも隠れもしない」と宣言。あっさり赤穂浪士に身を任せ、首を刎ねられようとします。しかしそこで目覚めた清水が怒りを孝証にぶつ

け、戦いに参戦します。赤穂浪士と吉良家の闘いが始まり孝証をひとまず安全な寝室に誘導する斎藤。しかし寝室には抜け穴があり、その抜け穴を通じて大石と合う約束をしていた孝証。こうして大石と対面した孝証は早く自分の首を刎ねるように言います。

躊躇う大石。しかし苦渋の決断で刀を振り下ろします。

戦場に戻り「吉良上野介の首をとった」と宣言する大石。戦いは終了します。

しかし夜が明けると、今度は上野介の首だけは渡さんと吉良家が赤穂浪士に立ち向かいます。激しい「首」の奪い合いの末、「首」が宙を舞います。落下する「首」。受け止めたのは…孝証でした。

大石が孝証に刀を振るうもどうしても切れず、切ったのは頭上に吊るしてあった塩俵でした。零れ落ちる塩と一緒に、何と塩俵の中から本当の上野介の遺体が落ちてきます。

迷わず上野介の遺体に刀を入れる大石。こうして本当に上野介の首を取る事となります。

大石に上野介の首を渡す孝証。怒りに震える清水は孝証に切りかかろうとしますが「剣が汚れる」といいその場を去ります。

上野介の首を見上げる孝証は「兄貴初めて人の役に立ったな」と語り掛けます。

屋敷に戻った孝証は上野介の遺体を塩漬けにしていた理由を斎藤に問います。まともに葬儀が出来なかったため、落ち着いたらせめて葬儀をしようと保存していたのでした。

孝証は報酬の 1000 両はいらぬ事、今後大変になる吉良家のためにこの 1000 両を役立てよう指示し、吉良邸を後にします。

小綺麗な僧侶姿になった孝証。大石達赤穂浪士の墓にお経を唱えます。上野介にも相当の被があった事から打ち首だけは避けられたものの、赤穂浪士たちはほぼ全員が切腹させられてしまいます。

孝証の側にくる桔梗。好きな所に行くよう言ったという孝証に静かにうなづく桔梗。そんな桔梗に「大石には生きてほしかった」と号泣する孝証。

桔梗にこれからどうするか問われ、真剣に仏道に行こうかと答える孝証。「じゃ女人禁制」と桔梗に言われ「じゃ町民でもいいか」とおどける孝証。二人町に歩いていくのでした。

○感想

ムロさんが主人公という事で面白い（ギャグ的要素も含め）ことは確定していましたが、予想を超えて面白かったです。正直、映画館でこんなに何度も笑ったのは「大日本人」や「しんぼる」以来かと思います。

それでいて初めは傍若無人、わがまま放題だった孝証が、上野介の悪行に驚き、吉良家を町をどんどん良くしていった描写は大変好感が持てました。

また吉良家、赤穂浪士双方のために自らの命を差し出す覚悟をしたシーン以降のシリアスな展開は普通に涙するような名シーン揃いです。まさに「笑いあり涙あり」を地で行くような作品だと思います。

ムロさんが主人公のため、孝証死亡のエンドはないと思っていましたが、最後上野介の首

を奪い合うシーンがラグビーの試合をパロディにしたようなギャク展開に変わった時点(それまでは滅茶苦茶シリアスな展開)で、孝証が生きている事を確信しました。

しかしそうは言っても史実がある訳でどのように落とすのか気になっていましたが、上野介の遺体を塩漬け保存とは驚きました。塩飴から始まり、斎藤の趣味が漬物など、塩を大切にしている藩という話が伏線になっていたのですね。まあ私は歴史に全く詳しくないので史実でも塩を名物にしていたのかも知れませんが…。

そんな歴史に全く詳しくない私でも大石内蔵助始め赤穂浪士たちが後に切腹させられることぐらいは知っていたので、どんなに孝証が大石達を生かしたいと思っても死という結果は変わらない事を知りながら観る事が少し心が痛かったです。この辺りは歴史ものの宿命ですね。

まあ前回観に行ったゴールデンカムイの土方歳三のように、大石達本当は生きていた～のようなぶっ飛んだ話もありとは思いますが…

源義経=ジンギスカン説などもありますしね～